2）川崎区のキャッチフレーズ

キャッチフレーズは、これから川崎区のまちづくりを区民みんなで進めていくために、川崎区の将来像をわかりやすくひとことで言い表すために検討しました。

●将来像は２０年後

将来像を何年後に設定するか（目標年次）では、10 年だとまちの姿を変えていくのは難しく、30 年では構想を継承していくことが難しいと考え、目安として 20 年と設定します。

ワークショップでは、長期的に取り組むことと、短期的にすぐできることがあるということも議論してきました。

○ 川崎区のキャッチフレーズ

豊かな生活と自然を育む　ものづくりのまち川崎区

●コラム：キャッチフレーズの具体的提案（参加者提案）

・わたしのまちづくりはわたしたちの手で、自然との共生のまちかわさき
・「あなたが創る２１世紀の川崎」まちづくりにあなたの声を
・企業と市民共生の町　川崎
・清潔な緑の街川崎
・伸び伸び川崎区、ふれあい川崎
・時を越えてよみがえる野性味の街川崎区
・公害、コンビナート何とでもいえ、快適な生活ができるものづくりの街川崎区
・変わった変わった　ものづくりの仲間の知恵で川崎区の空が変わった
・一度足を伸ばしてみませんか、ものづくりの街川崎区
・すきです、宣伝下手なものづくりの街川崎区
・産業とともにある自然と生活優先のまち
・青い空、白い雲、やさしい街　川崎区
・作る　自分たちの町
・Life of EASY KAWASAKI
・生き活き　かわさき　沸く湧く　かわさき

●コラム：中間とりまとめでのキャッチフレーズに対する意見

中間とりまとめでのキャッチフレーズは、考えるための素材として事務局から以下のものを提案しました。このキャッチフレーズについて、ワークショップや中間報告会の会場から意見をいただきました。これら意見は、最終的なキャッチフレーズを考える際のヒントになりました。

中間とりまとめでのキャッチフレーズ

「産業優先のまちから自然と生活優先のニュー下町へ」

- 産業・自然・生活の共生については、市民生活最優先が前提であり、その上で産業と自然との調和を考える。
- 職と住のバランスのとれるまち。
- 川崎区では産業が引き続き拠点として存在すると思う。共に生活するにはという考えから進めたらどうか。
- 産業と自然の両立のキャッチフレーズでいきたい。
- 「ニュー下町」をひらがなで「わたしたちのまち」等にしたらどうか。
- 災害に強い街
- 人の顔が浮かんでこない。子供、外国人、高齢者、女性が見えない。　など

意見をまとめると

［具体的意見］

●産業、自然、生活について

- 産業・自然・生活の共生は、優先ではなく調和
- 産業と自然は分離せず、両立した考えで
- 大企業優先のまちから自然環境に恵まれたまちへ
- 産業とバランスのとれたまちづくり。
- 自然はもっと強調。生活優先は市民生活優先とすべき。
- 産業をとるといけない。職と住のバランスのとれるまち。
- 市民のための「産業」の定義が大切ではないか。（市民の生活に必要なものなら優先になる）
- 川崎区では産業が引き続き拠点として存在する。共に生活することを考えたらどうか。
- 産業優先から自然と生活優先のまちへは概ね良いと思う。民主主義が成熟していない中では「産業と共生」といっても結局は「産業優先」となってしまう。
- 産業と自然の両立のキャッチフレーズでいきたい。
- 産業優先の街にしなければ収入も少なく、この多くの計画が達成困難と思われる。
- 現実の問題として産業なくして川崎区は成立しないと思います。
- 産業と共存できる道をもっと探るべきではないかと思います。
- 自然の生活はどこでもテーマになっている。先端的な表現がよい。
- 「優先」という響きが強すぎる。
- 産住地域か？ベットタウン地域か。

●下町について

- ニュー下町の「町」を「街」に。
- 下町という言葉よりニュータウンではどうか。
- 「まち」を何か違う言葉へ。
- 「ニュー下町」をひらがなで「わたしたちのまち」にしたらどうか。
- 川崎の街の良いところ、下町風なところが好きです。高齢化が進んでいる今、若い人も高齢者も一緒に楽しめる街にして欲しい。
- 「下町」は良くない。例えば「若い川崎」「安全川崎」として川崎の特色を出す。

●その他のキーワードなど

- 具体的提案をキャッチフレーズにする。（中身、場所が見えてこない）
- 商業の活性化を推進するイメージを入れてはいかがでしょう。
- これからの産業はリサイクルを中心にした有望な位置づけになっていく。これはハイテク江戸時代とも言える、活気のある生活が実現できようなの観点が必要。
- 災害に強い街
- 人の顔が浮かんでこない。子供、外国人、高齢者、女性が見えない
- もう少し親しみやすく
- 現状と随分かけ離れている
- 「ものづくり宣言」とキャッチフレーズの整合性を図る

3）まちづくりの5つのストーリーと具体的方針

①5つのストーリーを考えるにあたって

川崎区の成り立ち、現況・特徴、現在の課題およびまちづくりで大切なことから、川崎区の未来のすがたを都市計画マスタープランに引き寄せて考えると5つのストーリーが浮かび上がってきます。以下の図はその流れを示したものです。

これまで → **現　　在**

川崎区の成り立ち

・旧東海道、川崎大師などの歴史的な要素

・臨海工業地との関わりで発展した街

・戦後にほとんどの地区については区画整理で整った街

市民の現状評価

◎発展的
◎下町（住み良い）
○工業とベットタウンの町
○臨海部・工場
×古い・しゃれていない
×公害　　など

川崎区の現状・特性

・広域的立地が良い。（東京と横浜の間）
・大きく6つのゾーンに区分
・緑が少ない
・唯一海に面した区
・都心（川崎駅周辺）がある
・比較的道路が整備され、交通利便性がよい
・生活が変わろうとしている
・高齢化と人口減少

新しい大きな社会的動向

・産業構造の変化
（第2次から第3次産業へ）
・高齢化・少子化
・環境に対する意識の高まり
・生活スタイルの変化
・鉄道網の整備

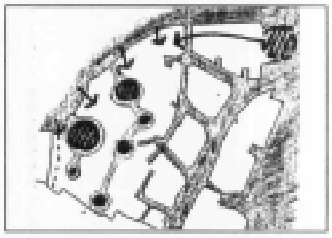
川崎のまちづくりで大切なこと

1．ものづくりのまちとして、地域活力のあるまちづくり
2．多摩川・海・緑（公園）・歴史に対するあこがれ・期待
3．誰もが暮らしやすく、安全なまちづくり
4．高齢化・少子化・あらゆる年齢層のことを考えるとともに、みんなが快適に暮らせることを前提とする
5．実現（実践）する内容を長期にとらえるとともに、都市（モノ）の整備とコミュニティ形成や川崎らしさなど「形として見えないこと」にの両面から考える

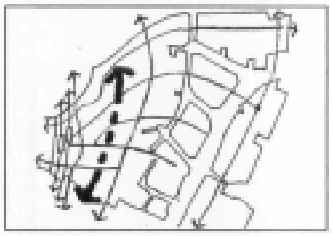
未　　来

●まちづくりの５つのストーリー

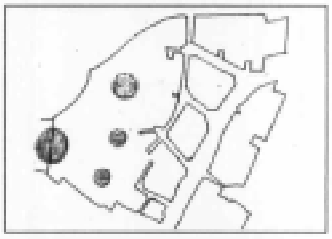
①緑や水などうるおいのある川崎区をつくる



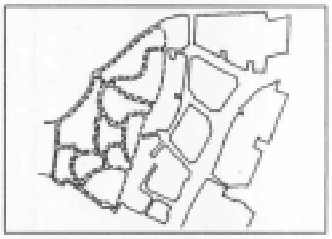
②地域間の連携を強くする



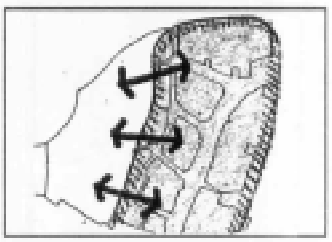
③川崎駅周辺や身近な生活の場を充実させる



④安心で暮らしよいまち（住環境）をつくる



⑤臨海部を変える



まちづくりの具体的提案（第４章）

② 5つのストーリー

5つのストーリーは、以下の内容で、川崎区の未来のすがたを実現するための柱となるものです。

1．緑や水などうるおいのある川崎区をつくる

川崎区は唯一海に面した区です。臨海部をもっと市民に開放するとともに、多摩川と合わせ、水とふれあえる自然を取り戻します。既存の公園についてもより使いやすい公園をめざして充実させます。また、歴史的な資源を活用し、これらをネットワークして緑や水などうるおいのある川崎区を提案します。

2．地域間の連携をつよくする

川崎駅への交通は大変便利ですが、これからは地域間の横のつながりや臨海部へのアクセスを強化する道路整備とバス路線網の充実が重要です。また、鉄道網の充実や環境問題に配慮した道路整備を進めることも提案します。そして歩行者、自転車、自動車が共存する道路づくりも提案します。

3．川崎駅周辺や身近な生活の場を充実させる

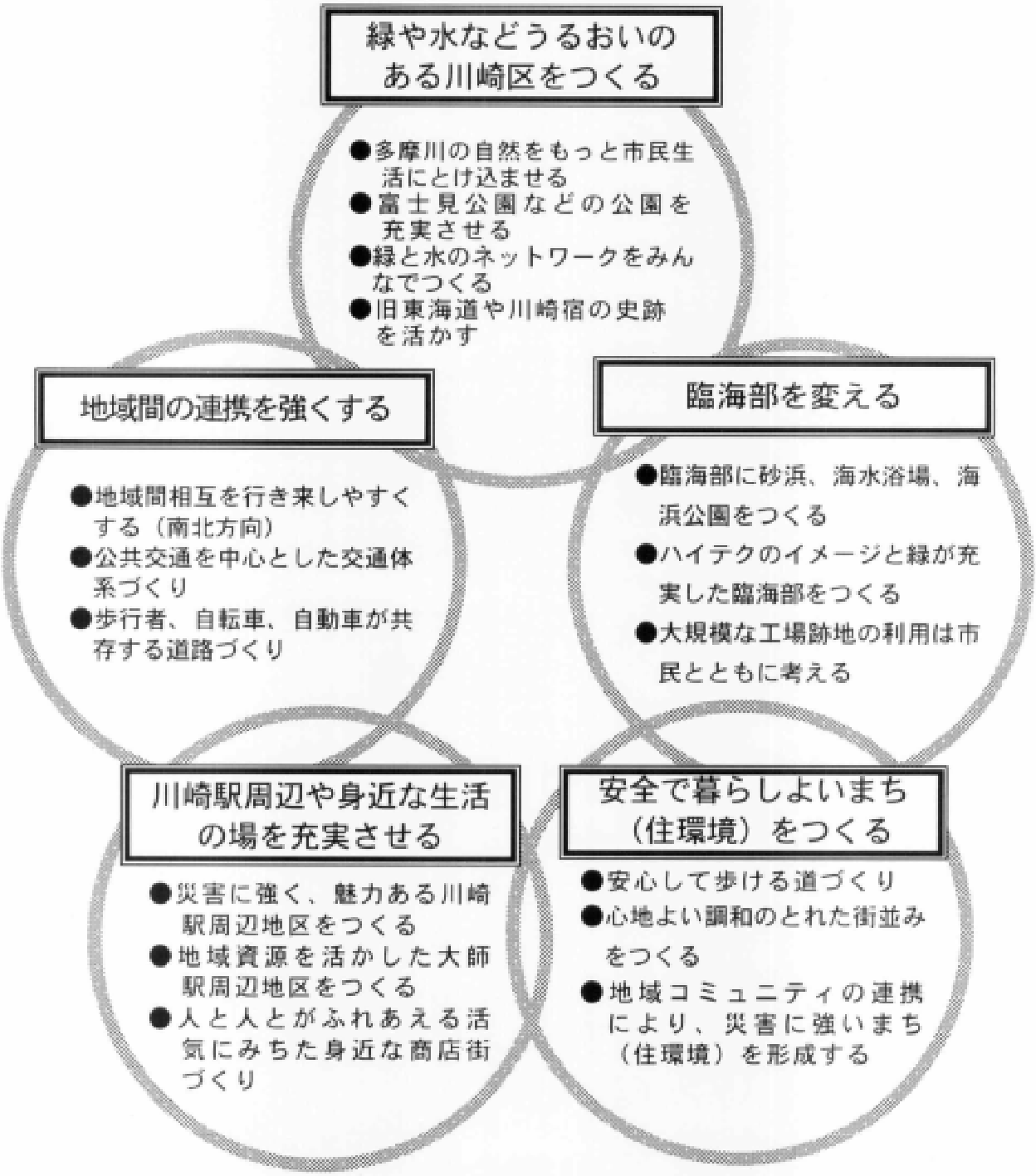
川崎駅周辺は生活者にとっても来街者にとっても、魅力ある街として整備する必要があります。その際、歩行者を第一に捉えた安全で快適な駅前とすることが重要です。大師駅周辺地区やその他の身近な商店街では、人が集い交流する場として、それぞれの地区の特性を活かしたまちづくりを進めていくことを提案します。

4．安全で暮らしよいまち（住環境）をつくる

高齢者が増えて行く中で、誰もが安全に暮らせるまちにするためには、安全で快適な道路づくりなどといった「モノ」の整備と地域コミュニティを大切にすることなどについて提案します。このことにより、災害に強いまち（住環境）としていくことが可能となってきます。

5．臨海部を変える

今までは企業のものづくりの場所だった臨海部でしたが、産業構造が変化し、大きく変わろうとしています。レクリエーションの場として市民に開かれ、ハイテクイメージと緑が充実した臨海部へ変えていくため、市民も計画に参加していくことを提案します。

５つのストーリーの連携と具体的方針

５つのストーリーは、下図のように互いに連携しあって、川崎区の未来のすがたを実現します。